様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年　4 月　2 日現在

機関番号：１２３０１
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：２０１０～２０１１
課題番号：２２７２００９９
研究課題名（和文）オブジェクティヴィストの詩の技法におけるイディッシュ語の影響

研究課題名（英文）Yiddish Influence on the Poetic Art of the Objectivists

研究代表者
宮本　文（MIYAMOTO　AYA）
群馬大学・教育学部・准教授
研究者番号：９０５０７９３０

研究成果の概要（和文）：2010 年度に執筆した論文「チャールズ・レズニコフの『証言』とアメリカン・フォークバラッド」において，バラッドを定点とすることにより、階級や性差といった問題を含め総体的にチャールズ・レズニコフの詩におけるイディッシュ語の影響を抽出し検討した。また、この成果を踏まえて，イディッシュ語とヘブライ語の伝統的なジェンダー的役割に注目し、「母子関係」という新たな視座を研究に取り入れ、2011 年度に研究発表（二回）でその成果を公開した。

研究成果の概要（英文）：In “Charles Reznikoff’s Testimony and American Folk Ballads” (2011), I employ ballad as a fixed point through which I can distil and synthesize each aspect of the Yiddish influence on Charles Reznikoff’s poetry, such as class and gender aspects. This achievement develops a new perspective of a mother-child (son) relationship discussed in the next two presentations (2011), which explore the traditional gender roles of Yiddish and Hebrew.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２０１１年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学
キーワード：アメリカ文学、詩、ユダヤ系アメリカ文学、モダニズム、イディッシュ

１．研究開始当初の背景

一貫した興味関心は「紋切り型が通用しなくなった状況に置かれたとき、人はどんな言葉をしゃべりうるのか」であり、文学はそのような危機的状況から生まれると考えてきた。そのような問題意識のもと、英語を執筆言語とするユダヤ系アメリカ人初の文学運動といわれるオブジェクティヴィスト研究を修士課程から現在まで続けてきた。修士論文ではユダヤ人アイデンティティとアメリ

カへの同化という相克に対し、記憶と忘却のダイナミズムを装置として取り込みながら「アメリカのユダヤ人であること」を示し続けたオブジェクティヴィストのひとり、チャールズ・レズニコフを取りあげた。それ以降、修士論文ではあまり扱えなかったレズニコフの重要な作品『証言』やルイス・ズーコフスキーを取り上げてきた。現在まで、日本であまり研究されることがなかったオブジェクティヴィストの全容を、主に詩の技法という側面から明らかにしてきた。

オブジェクティヴィストはモダニズムのユダヤ人版と称されることが多い。実際に彼らが初めて世に出たのはパウンドの後押しがあったからであり、彼らの挙げる「見たままに、聞いたままに書く」という（一見素朴に見えるが）ラディカルなアジェンダは、パウンドの言うところの“Don’t tell. Show it”に類するものである。また、詩の断片が不連続に連なっている“Discrete Series”というオブジェクティヴィストに共有されている詩形は、断片と集積がキーワードになるモダニズム文学全般に重ねることができる。しかしながら、パウンドを初めとしたモダニストたちの試みが、あくまで英文学の伝統を踏まえ、慣習的な言葉の伝統を壊し越えていこうとする運動から導き出されたものであったのに対して、ユダヤ系移民二世のオブジェクティヴィスト、チャールズ・レズニコフ、ルイス・ズーコフスキーにとっては、英文学の伝統は越えていくべきもの、というほど大きかったのだろうかという疑問が生じる。むしろイディッシュ語という要因がモダニスト的な手法に導いたのではないか、というのが本研究の出発点である。

レズニコフは 1894 年、ズーコフスキーは 1904 年にニューヨークで生まれ、ロウワー・イーストサイドやブラウンズヴィルといったユダヤ系コミュニティーで育った。コミュニティーではイディッシュ語が飛び交い、イディッシュ語の新聞が発行され、イディッシュ語演劇などの娯楽も盛んであった。両者とも両親は家庭内ではイディッシュ語を話しており、ズコーフスキーにおいては学校へ通うまでイディッシュ語を話し、最初の文学体験はイディッシュ語演劇でシェークスピアなど西洋文学を受容したものだった。

イディッシュ語で育った彼らがモダニストと同じ手法を選択したのは、もともと英文学的な伝統に根ざしていない彼らにとって、伝統的な英文学の表現が慣習的になりすぎて単なる紋切り型に陥ってしまったからではなく、そもそも英語で表現すること自体、彼らがイディッシュ語空間で慣れ親しんでいた知覚の様式を無効にしてしまうものだったからではないだろうか。また、彼らは毎日の散歩体験や日常の出来事を書くことが多いが、幼少期にイディッシュ語を通して眺めていた世界を英語で描写しようとしたときに、イディッシュ語空間で醸成された紋切り型は無効になり、それまで紋切り型で自動的に一連の物語として知覚されていた風景が断片化し、改めて「よく見ること、よく聞くこと、そしてそのとおり描写しようと努めること」という作業が必要になったのではないだろうか。彼らの言葉に最初から内在するイディッシュ語体験という障害（必ずしも悪い意味ではない）によって、モダニスト的な詩作が生まれたのではないかと仮説を立てた。

創作言語と母語が違う作家たちの研究は、ナボコフを始め、いわゆる亡命作家たちについて、近年とみに増えている。一方、オブジェクティヴィストのように創作言語を途中から変えたわけでもなく、積極的・意図的に創作言語ではないコミュニティーの言語をテクストに（例えば、方言として）援用している作家でない場合、コミュニティーの言語の影響を具体的に検証する研究は少ない。しかしながら、アメリカの移民二世や、場合によっては三世の作家の多くは、レズニコフたちと同様な言語的背景を持っており、表面には出ない言語の影響を探ることはアメリカ文学研究にとって実りの多いものだと考える。特にオブジェクティヴィストはモダニストというメインストリームに接合していること、また言語的な実験が行われていることから、創作言語に対するイディッシュ語の影響が探りやすいと思われる。

２．研究の目的

オブジェクティヴィストたちのイディッシュ語体験と彼らの詩作の関係を明らかにし、オヴジェクティヴィストを再定義することが目的であった。彼らの「見たままに、聞いたままに書く」というアジェンダや、「不連続の連続」という詩形は、他のモダニストたちと同様の出自ではなく、イディッシュ語体験により導き出されたものだということを明らかにすることを目指した。

３．研究の方法

本研究では(1)オブジェクティヴィストたち（主にレズニコフとズーコフスキー）がイディッシュ語をどの程度、使えていたのか、どのような影響があったのか、自伝的事実やマニュスクリプトを見ながら特定する。(2)レズニコフ、ズーコフスキーが属していたユダヤ・コミュニティーがどのような形でイディッシュ語空間を作り上げていたのか、文化的視点から考察する。(3)、(2)に付随してイディッシュ語で執筆していた作家たちとの

比較も行う。
(1)から(3)の作業を積み重ねた上で、最終的にイディッシュ語の影響がどのようにオブジェクティヴィストたちの詩作品に表れていたのか検討した。
具体的には、チャールズ・レズニコフの長編詩『証言』の構成や詩のロジックがバラッドに類似していることに注目し、バラッドを定点とすることで上記に挙げた考察を有機的にまとめ上げた。ここで周縁的な声であったバラッドと比較することによって、同じくヘブライ語に対して周縁的な声に位置づけられていたイディッシュ語が母親的・女性的な言説を担う言語であったという視座を得ることができた。
従って、研究計画の二年目では主にオブジェクティヴィストの詩の技法におけるイディッシュ語の影響を、「母子関係」に注目することによって検討が進められた。
また研究を遂行するにあたり、資料収集・調査旅行や学会・勉強会への参加も不可欠であった。2011 年度と 2012 年度にアメリカ、ニューヨークの YIVO、ニューヨーク市立図書館、また当時、イディッシュ語空間でありオブジェクティヴィストたちが生まれ育ったロウアー・イースト・サイドに出向き、オブジェクティヴィストたちの資料を入手する一方で、ユダヤ人コミュニティの記憶の形成に関する調査、イディッシュに関する資料を入手し、オブジェクティヴィストの言説が形成された背景について研究を進めた。
また、並行して月に一回ペースでイディッシュ語勉強会に参加した。加えてアメリカ文学会、日本英文学会、情報文化学会など専門家が集まる機会を捉えて、情報交換を行った。2011 年 11 月と 12 月にそれぞれアメリカ文学会東京支部月例会、情報文化学会において研究発表を行い、評価を仰いだ。

４．研究成果
研究成果として、主に雑誌論文「チャールズ・レズニコフの『証言』とアメリカン・フォーク・バラッド」と二つの研究発表「チャールズ・レズニコフの『証言』とバラッド的詩学」および「ユダヤ系アメリカ文学における父子／母子関係」が挙げられる。

(1)論文「チャールズ・レズニコフの『証言』とアメリカン・フォークバラッド」において、オブジェクティヴィストの一人であるチャールズ・レズニコフの『証言』におけるイディッシュ語の影響の一端を明らかにした。1885 年から 30 年間の裁判記録を元に創作された詩集『証言』とアメリカの伝統的なバラッドとの関係を見いだす試みである。この詩が物語性を排し断片の集積という体裁をとるのは、出来事を「物語」的に捉えることの不可能性を照らし出すためである。バラッドは本来、因果関係を論じるものではなく、運命を受け容れるしかない人々による出来事の断片的記録であり、そこでは「物語」を作り上げる権力も失われているのである。
本論文で、バラッドを定点とすることにより、階級や性差といった問題を含め総体的にイディッシュ語の影響を検討し抽出することができた。

(2)その研究成果を踏まえて、イディッシュ語とヘブライ語の伝統的なジェンダー的役割に注目し，「母子関係」という新たな視座を研究に取り入れ、先に挙げた二つの研究発表でその成果を公開した。
伝統的にヘブライ語は聖なる言語であり，男性の言語とされてきた。それに対してイディッシュ語は世俗的な領域に属する言語であり、女性の言語とされてきた．この比喩は家庭内の関係にも敷衍され、ヘブライ語は父、イディッシュ語は母とみなされてきた。そこでユダヤ系アメリカ文学における「母子関係」を探ることによって、イディッシュ語の影響を探ることができると考えた。「父子関係」が優位であるユダヤ系アメリカ文学において、「母子関係」は後景化されていることが多い。そこでユダヤ系アメリカ文学の基本形を確認しつつ、主にチャールズ・レズニコフの詩のなかで「母子関係」が前景化された作品群に注目し、その技法におけるイディッシュ語の影響を探った。
特に「チャールズ・レズニコフの『証言』とバラッド的詩学」では、バラッドと母親的／イディッシュ的言説に注目した。一方、「ユダヤ系アメリカ文学における父子／母子関係」では、ユダヤ系アメリカ文学における母親的言説を文学史的に検討し、オブジェクティヴィストを位置づけようと試みた。

(3)研究成果において、イディッシュ語の影響をさぐる上で「母子関係」という視座を得たことが一番大きなものであった。この視座は平成 24 年度から新たに始まる科研プロジェクトへの橋渡しへとなった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
① 宮本　文、「チャールズ・レズニコフの『証言』とアメリカン・フォーク・バラッド」群馬大学教育学部、『群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編』第 60 巻、

査読有、2011.2.14、pp. 177-86

〔学会発表〕(計２件)

① 宮本　文、「ユダヤ系アメリカ文学における父子／母子関係」情報文化学会、2011. 12. 18、國學院大學渋谷キャンパス若木タワー（東京都）

② 宮本　文、「チャールズ・レズニコフの『証言』とバラッド的詩学」日本アメリカ文学会東京支部11月月例会、2011. 11. 12、慶応義塾大学三田キャンパス（東京都）

６．研究組織

(1)研究代表者

宮本　文（MIYAMOTO　AYA）

群馬大学・教育学部・准教授

研究者番号：９０５０７９３０

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：